

1. 研究背景・目的

埼玉県さいたま市にある岩槻城は日光社参時に御成御殿として本丸御殿が利用された。享保13(1728)年の日光社参前に本丸御殿が焼失すると、城主の居宅として利用されてきた二ノ丸御殿が御成御殿として利用されるようになる。岩槻城二ノ丸御殿は城主の居宅から將軍の宿へと姿を変えた全国でも珍しい御殿である。

そこで本研究では、岩槻城二ノ丸御殿の変遷を明らかにし、近世城郭の御殿における位置づけを行うことを目的とする。

2. 研究方法

本研究は以下の方法で行う。

- ①岩槻城二ノ丸御殿に関する史料の収集
- ②収集した史料の分析・考察
- ③他の近世城郭の御殿との比較・考察

3. 岩槻城について

3.1 岩槻城の概要

元荒川右岸の台地にあり、川と沼沢地、西南に連なる台地を利用した平城である。本丸・二ノ丸・三ノ丸を中心に多くの曲輪からなる規模の大きい城郭であった。西から南は城下町も含む大構が囲み、北から東は元荒川を天然の要害とした。築城者・築城年ともに不明である。

3.2 現存遺構について

現存する代表的な遺構として、岩槻城城門ー黒門ー・岩槻城裏門・時の鐘(写真1)がある。これらの他に大構跡や障子堀跡などが現存する。



写真1 現存する遺構(左：黒門 中：裏門 右：時の鐘)

3.3 岩槻城二ノ丸御殿について

近世初期の岩槻城二ノ丸御殿についての詳細は不明である。元禄6(1693)年に三ノ丸御殿が建設されるまで城主の居宅として使用されていた。三ノ丸御殿建設後はほとんど使用されずに空き家となったが、享保13年の日光社参前の本丸御殿焼失により、増築が行われ、御成御殿として使用されるようになった。

4. 岩槻城二ノ丸御殿の絵図史料について

岩槻城二ノ丸御殿に関する絵図は表1の通りである。

表1 岩槻城二ノ丸御殿に関する絵図史料

武州岩付二之御丸指図(上田市立博物館松平文庫)
元禄10(1697)年以前
武州岩付二之御丸(上田市立博物館松平文庫)
元禄10(1697)年以前
將軍旅館図(『享保日光抄録』内閣文庫)
享保13(1728)年
二丸御屋形絵図(渡辺家文書)
安永4(1775)年
岩槻城御泊御取立并部屋割絵図(古河歴史博物館・鷹見泉石関係資料)
天保14(1843)年以前
二の丸居宅図(中野家文書)
制作年代不明
岩槻城二の丸御殿図(葦名家文書)
制作年代不明
御社参之節岩槻城御泊御取立并部屋割絵図
(岩槻市教育委員会・渡辺家文書)
制作年代不明

※■は御座所なし

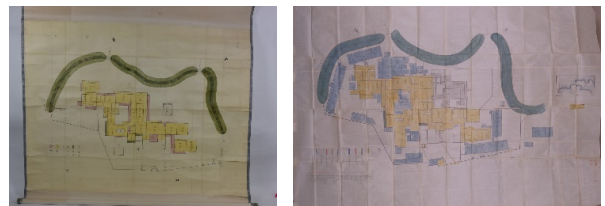
4.1 絵図史料に関する考察

絵図は、御座所の有無で御成御殿(御座所有)と城主の居宅(御座所無)に分けられる。

『二の丸居宅図』(中野家文書)(図1)には御座所は描かれていないが、絵図上に「御成門」、「御寝所跡」とあることから御成御殿として利用されていたことがわかる。また、幕末期に記されたと推測される『岩槻城内外并家中坪数建家道法其外城下道法等取調』(松村家文書)の「二丸之部」に「建坪 貳百四拾七坪」とあり、これは『二の丸居宅図』の御殿の坪数とほぼ一致する。このことから、『二の丸居宅図』は天保14年の社参以降に描かれたものと考えられる。

『岩槻城二の丸御殿図』(葦名家文書)は、他の絵図との比較から享保13年の社参時に描かれたと推測できる。

『御社参之節岩槻城御泊御取立并部屋割絵図』(岩槻市教育委員会・渡辺家文書)(図2)は、天保14年以前に制作された『岩槻城御泊御取立并部屋割絵図』(古河歴史博物館・鷹見泉石関係資料)と細かな違いはあるもののほぼ一致する。つまり、『御社参之節岩槻城御泊御取立并部屋割絵図』は、天保14年以前に制作された絵図であると考えられる。



左：図1 二の丸居宅図

右：図2 御社参之節岩槻城御泊御取立并部屋割絵図

4.2 絵図の変遷について

絵図を制作年代順に並べると以下の通りになる。

『武州岩付二之御丸指図』『武州岩付二之御丸』(元禄10年以前)→『岩槻城二の丸御殿図』『將軍旅館図』(享保13年)→『二丸御屋形絵図』(安永4年)→『御社参之節岩槻城御泊御取立并部屋割絵図』『岩槻城御泊御取立并部屋割絵図』(天保14年以前)→『二の丸居宅図』(天保14年以降)

岩槻城二ノ丸御殿は、このような変遷を辿ってきたと言える。

5. 岩槻城二ノ丸御殿に関する考察

5.1 岩槻城二ノ丸御殿の建設年代について

天正18(1590)年岩槻城落城後、高力清長が初代岩槻藩主となり、落城後の城郭と城下町の復興が求められた。この復興とともに岩槻城は近世城郭へと整備されたと考えられる。また、天正19年に徳川家康が陸奥国出陣で岩槻城に宿泊した記録があること、『勝田家文書』に鷹狩で徳川家康が岩槻城に宿泊した記述があることを踏まえると、岩槻城は近世城郭への整備とともに將軍の宿城としても整備されたと言える。慶長14(1609)年に本丸御殿が焼失したことから、それ以前に本丸御殿は建設され、御成御殿として利用されていただろう。二ノ丸御殿も本丸御殿建設とともに、城主の居宅として建設されたと言える。本丸御殿・二ノ丸御殿ともに天正18年の復興整備とともに建設されたと考えられる。

5.2 岩槻城本丸・二ノ丸・三ノ丸御殿の変遷

岩槻城本丸・二ノ丸・三ノ丸御殿の変遷は表2の通りである。

表2 岩槻城本丸・二ノ丸・三ノ丸御殿の変遷

年代	本丸	二ノ丸	三ノ丸
1590~1693	御成御殿	城主御殿	諸建物
1693~1728	御成御殿	空き家	城主御殿
1728~1871	空地	御成御殿	城主御殿

※1693年に三ノ丸御殿建設

5.3 岩槻城二ノ丸御殿の平面構成について

岩槻城二ノ丸御殿が城主の居宅であった『武州岩付二之御丸指図』、御成御殿であった『御社参之節岩槻城御泊御取立并部屋割絵図』、これらの絵図を基に制作した平面図は図3・4である。

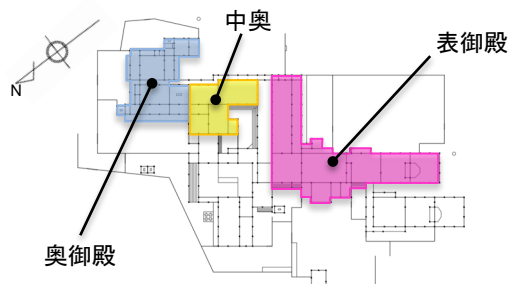


図3 城主の居宅のときの岩槻城二ノ丸御殿平面図

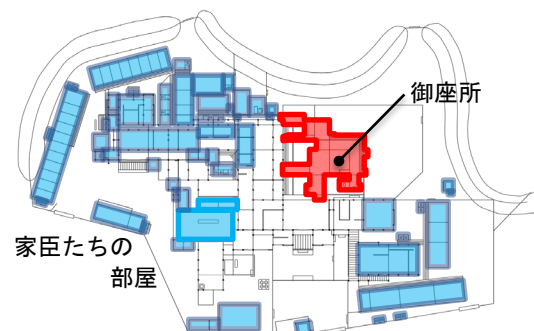


図4 御成御殿のときの岩槻城二ノ丸御殿平面図

5.4 岩槻城二ノ丸御殿の平面構成に関する考察

城主の居宅であった岩槻城二ノ丸御殿は、一般的な御殿と同じように表御殿・中奥・奥御殿に分かれた小規模な御殿である。一方、御成御殿となった二ノ丸御殿は、その部屋のほとんどが将軍やその家臣たちの部屋で占められる。これは、享保13年から日光社参が一大儀礼化し、多くの供奉人を宿泊させる必要があったためである。城主の居宅から御成御殿への変化に伴い、表御殿は出御・詰所・御座所などに、中奥・奥御殿は家臣たちの部屋に変化した。御成御殿となった二ノ丸御殿は、将軍やその家臣たちの部屋が大部分を占め、表・奥といった空間の区分は明確でないものとなっている。

6. 他の御殿との比較

6.1 比較対象の御殿について

岩槻城とともに、日光社参時に将軍の宿城であった古河城・宇都宮城を比較対象とする。これら3城は、元和3(1617)～寛文3(1663)年の間に行われた16回の社参では本丸御殿を、享保13・安永5(1776)・天保14年の社参では二ノ丸御殿を御成御殿として利用した。

6.2 比較による考察

古河城二ノ丸御殿(図5)・宇都宮城二ノ丸御殿(図6)ともに、城主の居宅であったときは表御殿・中奥・奥御殿に分かれた一般的な御殿であった。これらが御成御殿となったとき、岩槻城と同様に、その御殿の大部分が将

軍やその家臣たちの部屋で占められている。また、御座所や御殿を構成する家臣たちの部屋は3城ともほとんど一致する。このことから、社参時に御殿を利用する役職は決まっていたこと、利用する役職の部屋を確保できるように改修や増築が施されていたことがわかる。

御座所は、岩槻城では表御殿に、古河城では表御殿・奥御殿に、宇都宮城では奥御殿に接続している。御座所は奥に置くのが一般的であるが、これら3城では建物や敷地の形に合わせて御座所が置かれていると言える。

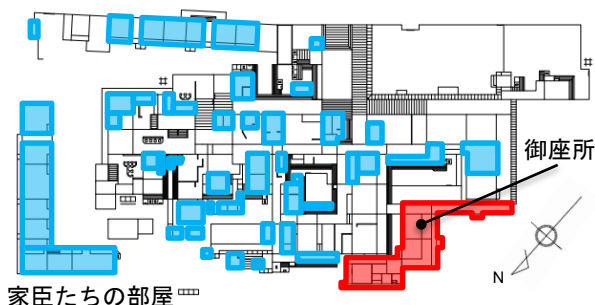


図5 御成御殿のときの古河城二ノ丸御殿平面図

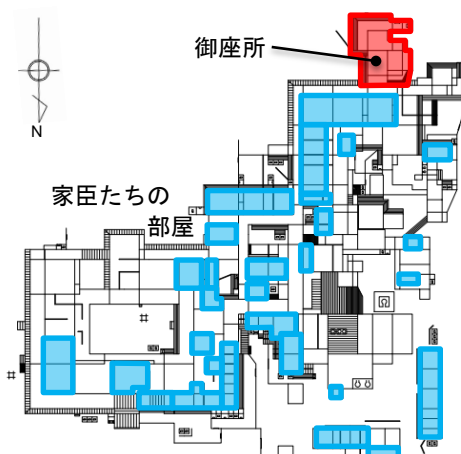


図6 御成御殿のときの宇都宮城二ノ丸御殿平面図

6. まとめ

御成御殿となった岩槻城二ノ丸御殿は、ほとんどの空間が将軍やその家臣たちの部屋で構成される。古河城二ノ丸御殿・宇都宮城二ノ丸御殿に関しても同様のことが言えることから、これは日光社参で将軍の宿として利用された御殿の特徴であると言える。近世城郭の御殿において、これら3城の二ノ丸御殿は一般的な御殿のように表・奥の区分が明確でないことから極めて異質な御殿である。こういった特異性から岩槻城二ノ丸御殿は、古河城・宇都宮城とともに、近世城郭の御殿において貴重な御殿であると言える。

参考文献

- 1) 関口陽子『岩槻城本丸御殿の復元研究』芝浦工業大学卒業論文 2007
- 2) 『岩槻市史 通史編』岩槻市 1985
- 3) 『岩槻市史 近世資料編Ⅲ 藩政史料(上)(下)』岩槻市 1981
- 4) 『岩槻郷土文庫第三集 岩槻城と城下町』岩槻市教育委員会 2005
- 5) 『岩槻城竹沢曲輪跡(第1地点)・岩槻城二の丸跡(第5地点)(さいたま市遺跡調査会報告書;第43集)』さいたま市遺跡調査会 2005
- 6) 根崎光男『将軍の鷹狩り』同成社 1999
- 7) 古河歴史博物館編『古河城 水底に沈んだ名城』古河歴史博物館 2010
- 8) 栃木県立博物館編『名城宇都宮城 しるとまちの移り変わり 平成十八年度企画展』栃木県立博物館 2006